

二者状況と三者状況における体験から見た ふれ合い恐怖的心性・対人恐怖的心性

永山 智之

I. 問題と目的

対人恐怖とは、「他人と同席する場面で、不当に強い不安と精神的緊張が生じ、そのため他人から軽べつされるのではないか、他人に不快な感じを与えるのではないか、いやがられるのではないかと案じ、対人関係からできるだけ身を退こうとする神経症の一種」（笠原、1975）であり、古くから日本によく見られる心理的問題とされてきた。一方で、その後「ふれ合い恐怖」という症候群が、現代日本の大学生世代の青年に見られる対人恐怖の型として新たに指摘されるようになった（山田、1989；山田ら、1987）。それによると、対人恐怖症者が出会いの場で初対面から問題となるのに対し、ふれ合い恐怖症者は会食や雑談などふれ合いの場のみで発現し、付き合いが長くなってから困難となるという違いがあり、それぞれ症状発現が3人関係、2人関係で増強される点で異なるという。さらに、両者は人数構造に対して特徴的な反応を示すことが指摘されている（笠原、1972、1977；小川ら、1987；山田ら、1987）。例えば、対人恐怖症者は二者状況は比較的自由に構成できるが、そこへ第三者が入ってきて今まで自分が話していた相手と会話を始めると、3人の中で自分だけが仲間はずれにされたようで、ひどく劣等感をおぼえ（笠原、1972）、その第三の人はどう思われるかという不安が起こるといふ（笠原、1977）。一方、ふれ合い恐怖症者に関しては、三者以上はよいが、二者で食事するとか雑談すると、自分からふれ合いを深めなければならない責任やプレッシャーを感じて苦しくなるとの指摘がある（山田ら、1987）。

こうした対人状況でのありようは、福井（2007）の発達の観点を交えた論にもつながるものであると考えられる。すなわち、対人恐怖症者が二者関係に留まっており、三者関係が持てないために社会的な関係に安定感が得られず、対人関係を回避するようになる一方で、ふれ合い恐怖症者は他者と二者関係を形成する能力が不十分で、接近・回避葛藤を対人場面から一時的に逃避することによって回避しており、母子関係の甘えによる依存的な関係でしか二者関係を形成することができず、三者関係の葛藤を処理しながら、3人以上からなる社会関係の中で新しい二者関係を形成する困難さに当惑している状態であるという指摘である。

二者状況と三者状況は対人関係の基本形であり、前者は個人的関係の基礎、後者は社会を構成する基礎単位とされるが（小川ら、1987）、以上のことから、対人恐怖やふれ合い恐怖の人々に特徴的な対人関係のありようや背景にあるテーマの一側面はこの2つの状況によって浮かび上がってくるということが想定できる。対人恐怖症の理解には対象関係を重視する立場がより有用であり、その実際の対人関係への影響が考えられること（松井、1990）を踏まえると、二者状況と三者状況にあらわれる対人関係のありようは個人の底にある対象関係を反映したも

のと考えられ、双方の対人状況における体験を検討することはクライアントの対人関係理解のためにも一定の意義があると考えられる。しかしながら、対人恐怖症者とふれ合い恐怖症者が双方の状況でどのように関係を捉え、どのような体験をしているかに関しては、臨床知見のみでは不明となってきた点も多く、双方の違いを解明するには実際の対人場面を用いた実証的研究によって詳細な検討を行う必要がある。実証的研究においては、両者が対人恐怖の心性・ふれ合い恐怖の心性という、一般の健常青年にも見られる心理的傾向とされることから（例えば、岡田、1993）、友人関係や不安を喚起しやすい対人状況を比較した研究も見られるが（岡田、1993、2002）、実際にどのような体験をしているかについては十分に明らかになっていない。そのため本研究では、対人恐怖の心性・ふれ合い恐怖の心性との関連から、二者状況（以下、二者と略記）と三者状況（以下、三者と略記）でどのように自他やその関係を巡って体験がなされているのかを比較検討することを目的とする。

なお、二者と三者の体験の比較を行うにあたっては、二者場面から三者場面に移行するという体験場面を設定する。この場面設定は相互作用の相手を一定にできるのに加え、二者と三者を別個に扱うことでは検討しきれない、個人の体験変容という観点からの比較が可能であり、本研究の目的に合致する最適な方法であると判断した¹。体験場面を実際に設定したのは、場面想定法では想起する場面や相手の性質にばらつきがあるが、実験法は条件を統制でき、比較しやすいことと、対人場面における具体的な他者との相互作用の中での「今、ここで」の体験を検討でき、より生きた詳細なデータを得ることが可能であると判断したためである。さらに、片畑（2006）は「体験」とは「感覚」や「感じ」など、言葉にならない状態で感じられているような曖昧なものを含んだ、内的で主観的、感覚的な意味をもつ言葉」として、まさにその個人がそのとき感じていること、感覚、感情など、個人内に起こっていることの総体としている。本研究ではこの論を鑑み、個人の体験を扱うにあたり、感覚と感情を取り上げることとした。先の笠原（1975）の定義や臨床知見からは、対人恐怖は対人の場にいる時に引き起こされる不快な感覚やそこでの特有の自他に対する感情、他者との関係の捉え方に特徴づけられるものであると考えられ、他者との関係の捉え方との関連を考慮しながら感覚と感情を検討することは適切であると考えられた。

Ⅱ. 方 法

質問紙の構成 ①個人特性尺度の質問紙 対人恐怖心性尺度：堀井ら（1997b）によるものを使用し、7段階で評定を求めた。ふれ合い恐怖の心性尺度：岡田（2002）の26項目のうち、因子分析の結果、採用された17項目を使用し、6段階で評定を求めた。②二者場面・三者場面に関する質問紙 1）二者と三者における関係の捉え方・感覚・感情についての自由記述 2）二者と三者の「感覚」に関するSD法評定尺度（以下、感覚尺度）：永山（2009）で対人場面での「感覚」を測る尺度として用いた「居心地」「活動性」「没入感」「まとまり」の4因子からなる尺度のうち、各因子の因子負荷量上位5つずつ計20項目を用い、7段階で評定を求めた。3）感情尺度：対人場面における自他に対する多面的な感情を測定するため、斎藤（1985）の情緒項目に予備調査で多く報告された「孤独感」「疎外感」を加えた計40項目に7段階で評定を求めた。

表1 調査内容

二者場面・三者場面に関する質問紙の質問項目

- ①今の二者(三者)での会話場面において、a)あなたは意識をどこに向けていましたか？b)またどのような感じで向けていましたか？
- ②今の二者(三者)での会話場面において、a)あなた自身はどのような感覚で、b)どんな感情を抱きましたか？
- ③今の二者(三者)での会話場面において、a)相手に対してどのような感情を抱き、b)相手をどのような存在として感じ、c)どのように相手との関係を捉えていましたか？(なお、三者場面に関しては、A)全体として B)二者場面からいる相手 C)三者場面から参加した相手について、それぞれ回答を求めた。)

実験に関するインタビューの質問項目

インタビューでは、①～③に加えて以下の④・⑤について順番に回答を求めた。

④他者の捉え方とその変化について

- ・二者の場面から、3人目が入ってきたのは自身にとってどのような体験でしたか？
- ・その時、3人目はどのような位置づけでどのような感情を抱きましたか？
- ・三者になって2人目に対する感情・位置づけ、及び2人の関係はどのようなものからどのようなものになりましたか？

⑤感覚尺度・感情尺度に関する質問

- ・二者(三者)ではどのような感じでしたか？また、自分と相手を比較してどうですか？
- ・二者と三者を比較してみてくださいか？数字が変化しているところの違い、また変化していないところでも質的な違いがあれば、それについてお答え下さい。

なお、感覚尺度に関しては各項目と因子ごと、感情尺度は項目ごとに尋ねた。

1) 体験場面 2

まず、ファシリテーターが調査協力者2名を相互作用のないように部屋まで誘導した後、2名にお互いの姿や回答が見えない位置に着席してもらった。そして、調査者がa)調査がコミュニケーションについて調べることを目的としており、これから2名で会話してもらうこと b)会話の様子をビデオで撮影すること c)撮影などを拒否する権利・調査を途中で中断する権利・プライバシーが守られることなどの調査協力者の権利について説明し、調査協力に関する同意書にサインを求めた。その後部屋の中央に置かれた対面した座席(120cm 間隔)に2名を誘導し、「今からお二方で会話をさせていただきます。後ほど協力して作業していただく予定です、お互いをよく知り合えるように会話を進め、より親密な関係になれるようにして下さい。会話時間は10分間です。なお、会話はお互いの自己紹介から始めて下さい。お名前を出すのに抵抗があるときは仮名を名乗っていただいてもかまいません。また、会話中は時計を外し、立ち歩かないようにして下さい」と教示した。それから、調査関係者は3か所の壁際に設置されたビデオカメラをセットし、「私たちは会話中は退室し、別室で待機しています。10分経ちましたら部屋に戻りますので、それまで会話して下さい」と伝えて退室した。10分後、調査者はノックをして入室し、会話を止めるように伝えた後、ビデオを止め、調査協力者に元の席に戻ってもらった。そして、お互いの回答が相手に知られることはないことを伝えた上で、二者場面に関する質問紙への回答を求めた。この間、三者場面からの調査協力者をファシリテーターが別室に誘導し、「既に2名で会話をしてもらっていて、そこに入って3名で会話してもらうこと」を伝えてから、先の2名と同内容の手続きを踏んだ。その後、調査者が二者場面に関する質問紙への回答を終えた2名に「これから3名で会話してもらうため、もう1名の調査協力者を呼んでください」もう1名にも調査内容の説明を済ませてあることを伝え、ファシリテーターがもう1名の調査協力者を部屋まで誘導した。その後、3名を部屋の中央に三角形の位置に置かれた会話用の座席(各120cm間隔)に誘導し、二者場面と同様の手続きで10分間会話してもらい、お互いの姿や回答が見えない位置で三者場面に関する質問紙への回答を求めた。最後に質問紙への回答が終わった調査協力者から順に、個別にデブリーフィングを行った。

2) インタビュー

さらに後日、追加調査に同意した調査協力者に対して実験の内容に関するインタビューを行った。インタビューでは、上記の各質問項目について、a)二者場面 b)三者場面 c)二者場面と三者場面の比較の順に回答してもらった。

調査協力者 青年期にあたる大学(院)生を対象とし、2008年10月～11月に調査・実験を行った。1) 個人特性尺度の質問紙に183名(男性88名、女性95名；平均20.1歳、SD=1.55)が回答した。2) 実験は初対面・同性同学年の組み合わせで行い、27組81名が参加し、うち二者場面・三者場面の双方に参加した27組54名(男性11組22名、女性16組32名；平均20.8歳、SD=1.68)を分析対象とした。なお、調査協力者の組み合わせはランダムに決定した。3) 実験に関するインタビューには32名(男性10名、女性22名；平均20.9歳、SD=1.56)が参加した。

調査関係者：体験場面の説明・進行、及びインタビュー(表1)は調査者が行い、三者場面から参加する協力者への教示は大学生5名(以下、ファシリテーターと表記)が交代して行った。

Ⅲ. 結果と考察

① 対人恐怖心性尺度とふれ合い恐怖的心性尺度の因子分析

まず、183名のデータを用い、対人恐怖心性尺度に関して因子分析（主因子法—Promax 回転）を行なった結果、固有値の減衰状況から堀井ら（1997b）と同様の因子構造が得られた。対人恐怖心性の各因子については、青年期後期にあたる大学生では他者との関わりから生じる対他的不安意識と自分の存在から生じる対自的不安意識が明確に分化するため、対他的側面と対自的側面に分けて検討する必要性が示唆されている（堀井ら、1997a）。そのため、本研究においては、対他的不安意識（「集団に溶けこめない」因子、「社会的場面で当惑する」因子、「目が

表2-1 対人恐怖心性尺度とふれ合い恐怖的心性尺度による因子パターン

	原尺度	1	2	3	4	共通性
人がたくさんいるところでは気恥ずかしくて話せない	c	0.98	-0.25	-0.15	0.12	0.79
大ぜいの人のなかで向かい合って話すのが苦手である	c	0.90	-0.22	-0.09	0.16	0.76
会議などの発言が困難である	c	0.87	-0.20	-0.17	0.12	0.69
人前に出るとオドオドしてしまう	c	0.84	-0.09	-0.14	0.19	0.80
引っ込みじあんである	c	0.83	-0.13	0.08	0.01	0.75
人が大ぜいいると、うまく会話の中に入っていけない	b	0.71	0.20	-0.02	-0.11	0.79
集団のなかに溶け込めない	b	0.59	0.30	0.08	-0.08	0.86
向かい合って仕事をしているとき、相手に顔を見られるのがつらい	d	0.57	-0.02	0.26	0.00	0.80
人との交際が苦手である	b	0.51	0.37	0.01	-0.01	0.79
グループでのつき合いが苦手である	b	0.46	0.35	0.18	-0.21	0.82
人の目を見るのがとてもつらい	d	0.45	0.12	0.25	-0.05	0.85
顔をジーンと見られるのがつらい	d	0.45	-0.02	0.29	0.02	0.78
仲間のなかに溶け込めない	b	0.43	0.32	0.22	-0.09	0.83
人と目を合わせていられない	d	0.43	0.17	0.27	-0.12	0.82
人と話すとき、目をどこにもついてもいいかわからない	d	0.40	0.17	0.27	0.01	0.70
できれば食事は一人でとりたい	A	-0.21	0.86	-0.08	0.05	0.71
友達と一緒にいるよりも一人でいる方が気が楽だ	A	-0.29	0.80	0.01	0.08	0.62
他人と親しくなるのはうっとうしい	A	-0.04	0.78	-0.03	0.01	0.69
昼食は友だちと一緒に食べるのが好きである	A	0.20	-0.78	0.09	-0.10	0.67
人間と関わるよりも物と付き合っている方が楽だ	A	-0.03	0.75	-0.14	0.05	0.63
できることなら人とあまり関わりになりたくない	A	0.15	0.75	-0.17	0.09	0.72
友だちと一緒に食事をするのは好きでない	A	0.10	0.68	-0.11	-0.05	0.66
一人で趣味に没頭していたい	A	-0.10	0.63	-0.03	0.00	0.62
大勢の友だちとワイワイ騒ぐのが好きだ	A	-0.28	-0.56	0.14	0.17	0.57
友達数人での場面は苦手だ	A	0.27	0.46	-0.06	-0.10	0.57
人と雑談するのは苦手だ	B	0.31	0.44	0.05	-0.03	0.68
友達と2人きりでいる場面は苦手だ	B	-0.04	0.41	0.12	0.18	0.63
人といとも話題がなくて困ることが多い	B	0.35	0.36	0.00	0.08	0.69
自分が人にどう見られているのかよく考えてしまう	a	-0.02	-0.39	0.95	0.00	0.82
他人が自分をどのように思っているのかとても不安になる	a	0.01	-0.41	0.90	0.05	0.82
自分が相手の人にイヤな感じを与えているように思ってしまう	a	-0.06	-0.04	0.84	0.00	0.69
人と会うとき、自分の顔つきが気になる	a	-0.02	-0.11	0.79	-0.09	0.61
自分のことが他の人に知られるのではないかとよく気にする	a	0.02	-0.02	0.74	0.02	0.65
他の人は自分を受け入れてくれない	B	-0.13	0.27	0.56	0.08	0.71
他人とちょうどよい距離をとるのが難しい	B	-0.02	0.26	0.54	0.05	0.68
他人の本音で、自分が傷つけられそうな気がする	B	0.04	0.18	0.46	0.05	0.64
人という場面で、言葉がなくなってしーんとしてしまわないかと不安になる	B	0.01	0.22	0.37	-0.02	0.50
すぐに気持ちがぐじける	e	0.08	-0.03	-0.06	0.86	0.73
根気がなく、何ことも長続きしない	e	-0.05	0.06	-0.08	0.83	0.77
意志が弱い	e	0.13	-0.08	-0.09	0.75	0.71
ひとつのことに集中できない	e	-0.06	0.05	0.06	0.67	0.66
計画を立てても実行がとまなわない	e	0.23	-0.13	-0.13	0.66	0.66
充実して生きている感じがしない	f	0.01	0.08	0.18	0.55	0.78
生きていることに価値を見いだせない	f	0.07	0.13	0.16	0.49	0.77
何をやってもうまくいかない	f	0.09	0.13	0.27	0.48	0.76
いつも疲れているような感じがする	f	0.02	0.16	0.17	0.48	0.74
いつも頭が重い	f	-0.05	0.20	0.22	0.39	0.71
累積%		34.30	43.06	48.42	52.78	
因子間相関	2	0.56				
	3	0.61	0.46			
	4	0.46	0.32	0.53		

【対人恐怖心性尺度】a: 自分や他人が気になる b: 集団に溶けこめない c: 社会的場面で当惑する

d: 目が気になる e: 自分を統制できない f: 生きていることに疲れている

【ふれ合い恐怖的心性尺度】A: 対人退却 B: 関係調整不全

気になる」因子の合計得点)と対自的不安意識(「自分や他人が気になる」因子、「自分を統制できない」因子、「生きることによって疲れている」因子の合計得点)の2変数を用いた。 α 係数は順に.93、.92であった。次に、ふれ合い恐怖的心性尺度に対して因子分析(主因子法—Promax 回転)を行った結果、固有値の減衰状況から岡田(2002)と同様の因子構造が得られ、「対人退却」因子と「関係調整不全」因子を抽出した。 α 係数は順に.89、.83であった。さらに、両尺度の全項目を併せて因子分析を行い、固有値の減衰状況から4因子を抽出した(表2-1)。その結果、「対人退却」因子については岡田(2002)や伊藤ら(2008)と同様、従来型の対人恐怖と異なる因子的まとまりを持つことが確認された。一方、「関係調整不全」因子は従来型の対人恐怖と異なる内容と共に、対人恐怖心性尺度の「自分や他人が気になる」因子と共通する内容も含んでいた。

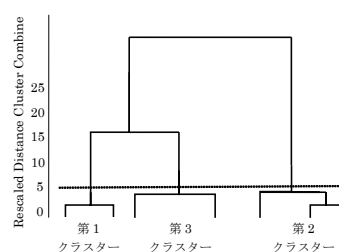


図1 クラスター・デンドログラム

目を併せて因子分析を行い、固有値の減衰状況から4因子を抽出した(表2-1)。その結果、「対人退却」因子については岡田(2002)や伊藤ら(2008)と同様、従来型の対人恐怖と異なる因子的まとまりを持つことが確認された。一方、「関係調整不全」因子は従来型の対人恐怖と異なる内容と共に、対人恐怖心性尺度の「自分や他人が気になる」因子と共通する内容も含んでいた。

② 対人恐怖心性尺度とふれ合い恐怖的心性尺度でのクラスター分析

まず、対人恐怖心性尺度の対他的不安意識・対自的不安意識の2変数とふれ合い恐怖的心性尺度の2因子(対人退却・関係調整不全)の2変数の計4変数を投入変数としてクラスター分析(ユークリッド平方距離、ward法)を行なった結果、3クラスターが得られた(図1)。続いて、各変数についてクラスター(以下、CLと表記)ごとに平均値を算出し、一要因分散分析を行なったところ、CL1は全変数の得点が低く、CL2は全変数の得点が高く、CL3はふれ合い恐怖的心性尺度の「対人退却」因子のみがCL1よりも高く、それ以外の変数の得点が中程度であった(表2-2)。CL2は従来の対人恐怖的心性もふれ合い恐怖的心性も高い群であり、CL3は従来の対人恐怖的心性とは異なる因子的まとまりを持った「対人退却」因子のみが高かったため、対人恐怖的心性は高くなく、ふれ合い恐怖的な特徴を持つ群と考えられた。

表2-2 全回答者・各クラスターでの各変数の平均値と標準偏差、及びクラスター間での分散分析結果

	第1クラスター n=38	第2クラスター n=56	第3クラスター n=89	全体 n=183	F値	多重比較 (Tukey法)
対他的不安意識	37.8(12.7)	78.6(10.1)	58.6(9.9)	60.4(17.9)	169.3 **	1<3<2
対自的不安意識	29.8(8.6)	72.7(11.8)	48.8(8.0)	52.1(18.1)	244.2 **	1<3<2
対人退却	18.5(4.9)	31.5(9.1)	29.6(6.1)	27.9(8.5)	44.9 **	1<2,3
関係調整不全	15.0(5.3)	27.5(5.5)	22.0(3.9)	22.2(6.4)	80.4 **	1<3<2

** p<.01

③ 各クラスター間の二者状況・三者状況における体験の比較検討

本研究では、対人恐怖心性尺度とふれ合い恐怖的心性尺度を変量としたケースのクラスター間での二者・三者の体験の一般的な違いを明らかにすることを目的とし、①二者から三者への移行に伴う体験変容②二者・三者それぞれでの体験の2つの観点から数量的検討を行う。

まず、各クラスター間での体験変容の相違を検討するため、感覚尺度の下位尺度得点、感情尺度の(a)自己感情(b)二者からいた相手(以下、2人目と表記)に対する感情に関する項目得点を従属変数として、2(二者—三者)×3(クラスター)の二要因分散分析を行った(表3・4分析1)。その結果、「まとまり」・不満で交互作用が有意であり、さびしさ・イライラ・気がね・うらやましさを有意傾向が見られた(図2～7)。単純主効果の検定の結果、CL2は二者より

三者で「まとまり」を感じなくなり、不満を感じ、さびしさやイライラを感じる傾向にあった。加えて、CL3は二者より三者でさびしさを感じていた。また、全ての群で2人目に対する気がねが三者になって減少していた。うらやましさについては、単純主効果は見られなかった。

次に、二者・三者それぞれにおけるクラスター間での体験の違いを検討するため、二者・三者それぞれに関して感覚尺度の下位尺度得点、感情尺度の(a)自己感情(b)2人目(c)三

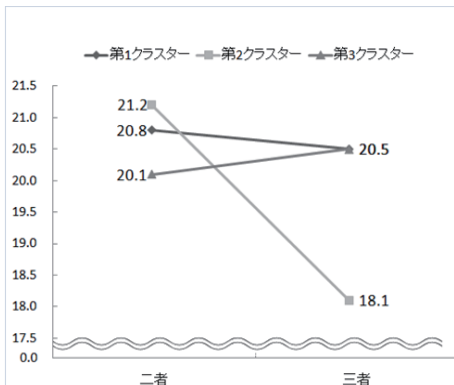


図2 各クラスターの「まとまり」得点平均

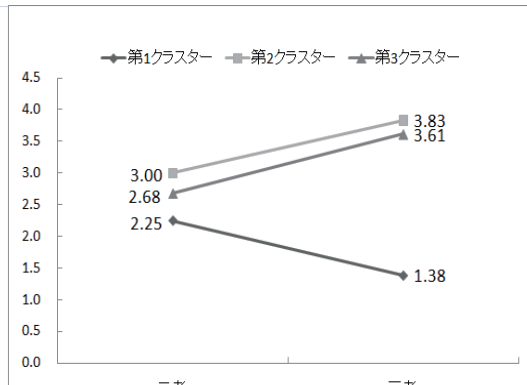


図3 各クラスターの「さびしさ」得点平均

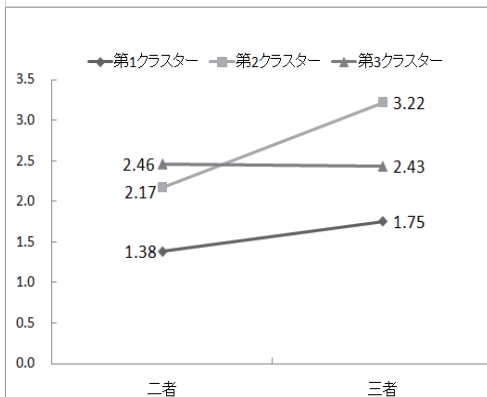


図4 各クラスターの「イライラ」得点平均

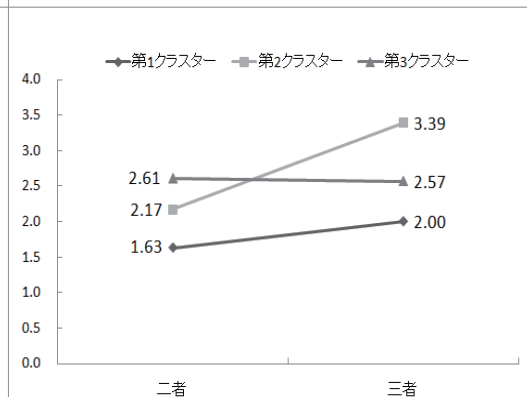


図5 各クラスターの「不満」得点平均

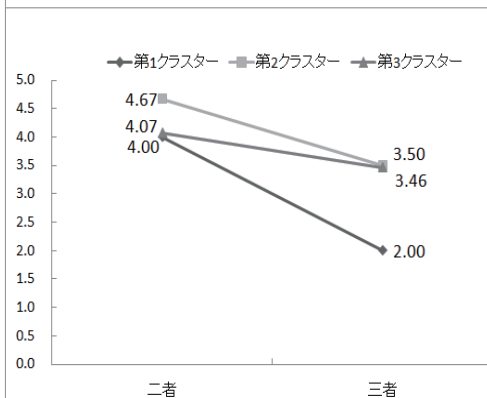


図6 各クラスターの「気がね」得点平均

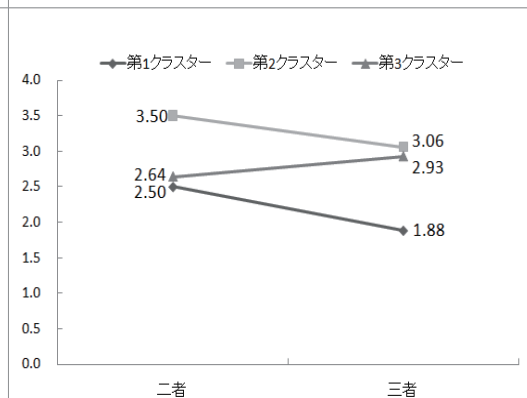


図7 各クラスターの「うらやましさ」得点平均

者から加わった相手（以下、3人目と表記）に関する項目得点を従属変数として、一要因分散分析を行った（表3・4 分析2・表5）。その結果、以下の特徴が示された。すなわち、① CL2・CL3はCL1よりも二者でも三者でも「活動性」を感じず、三者でさびしさ・苦悩・疎外感を感じ、驚きが少なく、2人目に気がねを感じていた。② CL2は、CL1・CL3よりも3人目に恐怖を感じる傾向があった。③ CL2はCL1よりも（a）二者では苦悩を感じ、（b）三者では「居心地」が悪く、悲しみ・くやしき・不満・孤独感が高く、イライラを感じる傾向があった。加えて、（c）三者では2人目への好意が少ないと感じ、（d）3人目にはうらやましさを感じ、屈辱感を感じる傾向があり、（e）2人目にも3人目にも劣等感を感じる傾向があった。④ CL2はCL3よりも三者で「まとまり」を感じていなかった。⑤ CL3はCL1よりも二者でイライラを感じる傾向があった。

④ 考 察

考察においては、量的分析結果に関連すると考えられる語りを引用し、数量的検討の解釈に用いることによって、見られた違いをより詳細に検討する。その際、恣意性を極力排するため、KJ法を参考に心理学専攻の大学生1名と合議しながら分類を行い、体験全体の特徴を整理した上で、自由記述及びインタビューで得られた語りの中から全体やクラスターの典型例を抽出した。³

(i) 二者から三者への移行の観点から

まず、3群に共通して二者から三者になると2人目への気がねが減っているが、「さっき一度話したので慣れた」「既知の相手になった」というように、二者では初対面だった相手に対して慣れが生じ、3人目の加入によって相対的に2人目がより知っている相手となったためだと考えられる。中でも、CL1では気がねが他の群より比較的評定値が大きく下がり、さびしさも他の2群と異なり、評定値が減少傾向にある。「二者ではテンションがあがり、緊張。相手は他者。三者で2人目は3人目を一緒に迎え入れるパートナー」という語りが見られたように、他者であった2人目との関係を支えと感じ、気がねが大きく減り、さびしさが増さなかったと考えられる。

次に、CL2に関しては、三者になると「まとまり」が大きく下がり、2人目への気がねが減っている一方でさびしが増え、不満やイライラといった敵対の情緒（斎藤、1990）が高くなっていた。そこでは、「二者では相手の人と結びつきが割とあるかなと思っていたけど、三者になると相手二人に先に関係が出来てしまっていて、二人の間で通じ合うものがあるって自分にはそれが向かないんじゃないかという恐れが先行してしまい、その悔しさがある。すごく疎外されている感じが強くなって、それに対して結構不満を感じている」という語りが見られたように、三者になると2人目と自分が離れ、相手二人と自分一人という構図になる語りが多く見られた。「まとまり」とは一定さやまとまった感じに関する感覚である。また、高橋（1976）によると、3人での状況では、2人あるいはそのうちのひとりが自分の相手（たち）となる関係と、一対一の関係にある他の2人を観察している立場が取り出されるが、前者はとくに親しい間柄であり、後者は、全く見知らぬ人との間柄である。そして、「3人の状況」とは、このどちらの間柄をも十分に安定させない状況であるという。CL2は相手同士の関係を意識することで、間柄が安定しない状況で他の二人の関係に入ろうとする不安定な立場となって一人さ

表3 二者と三者における全体及び各クラスターの感覚・自己感情の平均値と標準偏差、及び分散分析結果

		第1クラスター		第2クラスター		第3クラスター		全体		分析1	分析2
		(n=8)		(n=18)		(n=28)		(n=54)		F値	F値
		M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	(交互作用)	多重比較
[感覚]											
居心地	二者	25.8	4.86	22.3	5.25	22.8	5.09	23.1	5.14	0.38	1.32
	三者	26.1	3.72	20.4	6.94	21.7	4.42	21.9	5.54		3.21 * 1>2
活動性	二者	27.0	3.34	22.3	5.20	22.0	4.47	22.8	4.84	0.29	3.92 * 1>2,3
	三者	26.4	3.66	19.8	8.48	19.5	4.54	20.6	6.42		4.29 * 1>2,3
没入感	二者	16.1	4.73	17.2	4.37	16.5	3.31	16.7	3.85	0.44	0.25
	三者	17.0	3.78	17.1	3.03	17.5	2.78	17.3	2.97		0.16
まとまり	二者	20.8	2.92	21.2	3.50	20.1	2.58	20.5	2.95	3.83 *	0.77
	三者	20.5	3.34	18.1	3.71	20.5	2.95	19.7	3.41		3.27 * 2<3
[自己感情]											
さびしさ	二者	2.25	1.39	3.00	1.46	2.68	1.22	2.72	1.32	2.44 +	0.92
	三者	1.38	0.74	3.83	1.98	3.61	1.37	3.35	1.73		7.85 * 1<2,3
悲しみ	二者	1.50	0.93	2.11	1.41	2.00	0.82	1.96	1.06	0.95	0.95
	三者	1.13	0.35	2.56	1.79	2.18	1.16	2.15	1.39		3.18 + 1<2
苦悩	二者	1.50	1.07	3.28	1.93	2.68	1.44	2.70	1.66	0.14	3.50 * 1<2
	三者	1.25	0.46	3.39	2.23	2.64	1.37	2.69	1.75		4.76 * 1<2,1<3+
絶望	二者	1.13	0.35	1.67	1.37	1.36	0.56	1.43	0.90	0.89	1.17
	三者	1.13	0.35	2.11	1.64	1.46	0.84	1.63	1.17		2.71 +
喜び	二者	5.50	0.93	4.78	1.35	4.75	1.27	4.87	1.26	0.06	1.18
	三者	5.25	0.71	4.39	1.72	4.46	1.14	4.56	1.33		1.32
うれしさ	二者	5.75	1.04	4.94	1.26	4.96	1.29	5.07	1.26	0.04	1.38
	三者	5.38	0.74	4.44	1.82	4.46	1.17	4.59	1.39		1.51
イライラ	二者	1.38	0.74	2.17	1.42	2.46	1.17	2.20	1.25	3.09 +	2.51 + 1<3+
	三者	1.75	1.39	3.22	2.07	2.43	1.03	2.59	1.56		3.00 + 1<2+
不安	二者	3.88	1.81	4.39	1.88	4.25	1.29	4.24	1.57	0.20	0.29
	三者	2.75	1.91	3.72	2.27	3.50	1.75	3.46	1.95		0.69
恥ずかしさ	二者	4.75	1.16	4.78	1.90	4.21	1.45	4.48	1.58	0.88	0.83
	三者	2.88	1.73	3.94	2.34	2.96	1.62	3.28	1.93		1.66
くやしさ	二者	1.13	0.35	1.94	1.16	1.64	0.87	1.67	0.95	2.03	2.16
	三者	1.13	0.35	2.83	2.09	1.93	1.21	2.11	1.59		4.01 * 1<2
安心	二者	4.50	1.20	4.33	1.85	4.39	1.42	4.39	1.52	1.49	0.03
	三者	5.25	1.58	4.00	1.81	4.50	1.26	4.44	1.54		1.93
満足感	二者	5.38	1.30	4.61	1.50	4.32	1.54	4.57	1.51	0.92	1.55
	三者	5.00	1.07	3.78	1.93	4.14	1.38	4.15	1.57		1.72
不満	二者	1.63	0.92	2.17	1.10	2.61	1.47	2.31	1.31	3.52 *	1.97
	三者	2.00	1.41	3.39	1.85	2.57	1.17	2.76	1.52		2.98 + 1<2+
誇り	二者	2.63	1.51	2.61	1.24	2.79	1.34	2.70	1.31	0.26	0.11
	三者	1.88	1.46	2.11	1.45	2.39	1.20	2.22	1.31		0.57
驚き	二者	5.38	0.92	4.11	2.00	4.50	1.29	4.50	1.55	0.70	1.90
	三者	5.25	0.71	3.28	2.16	3.54	1.71	3.70	1.87		3.65 * 1>2,1>3+
孤独感	二者	1.88	1.13	2.61	1.54	2.54	1.17	2.46	1.30	1.25	0.98
	三者	1.75	1.16	3.67	2.20	2.96	1.48	3.02	1.80		3.48 * 1<2
疎外感	二者	1.63	1.06	2.56	1.62	2.32	1.22	2.30	1.35	1.18	1.33
	三者	1.63	1.06	3.83	1.98	3.04	1.55	3.09	1.77		4.98 * 1<2,1<3+

* $p<0.05$, + $p<0.10$ (Turkey法による多重比較については有意傾向に+を付した)

びしさを感じるような構図となり、「まとまり」を感じられなくなったと考えられる。さらにここでは、2人目への気がねが減っている一方で「まとまり」を感じられなくなり、さびしさが増していることや、語りのように既に築かれた自分と2人目との関係よりも、初対面同士でまだ関係を築いていないはずの2人目と3人目の関係が先行して捉えられる点が特筆されるが、これらからはそれぞれの他者との個々人の関係以上に、三者という場の構造そのものに対する反応が優勢となっていたことが推察される。これは、対人恐怖パノノアの「症状の出現が、状況のあるパターンによって規定されていて…パターンを構成する要素が何であるかはあまり重要でなく、そのパターンそのものが問題となる」という小川ら(1987)の指摘とも通じるが、CL2では敵対の情緒を感じながらも相手同士の関係ありきで関係を持つパターンが場の構造からの影響で生じることが推察される。そこでは「一人増えたことによって2人目とのつながりが濃くなったような気がしたが、その分自分以外の二人が話していると疎外感を感じ、発言しにくいように感じた。2人目がいるので強気になったし、3人目に対して排他的になる

永山：二者状況と三者状況における体験から見たふれ合い恐怖的心性・対人恐怖的心性

表4 二者と三者における全体及び各クラスターの2人目に対する感情の平均値と標準偏差、及び分散分析結果

		第1クラスター		第2クラスター		第3クラスター		全体		分析1	分析2
		(n=8)		(n=18)		(n=28)		(n=54)		F 値	F 値
		M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	(交互作用)	多重比較
[他者感情]											
好意	二者	6.25	1.39	5.61	1.33	5.43	1.17	5.61	1.27	0.45	1.33
	三者	6.00	1.07	5.00	1.24	5.14	0.89	5.22	1.08		2.72 + 1 > 2 +
愛情	二者	4.38	1.69	3.78	1.48	3.86	1.18	3.91	1.35	0.13	0.57
	三者	4.00	2.07	3.61	1.61	3.71	1.15	3.72	1.45		0.20
かわいい	二者	4.75	1.98	4.50	1.89	4.14	1.56	4.35	1.72	0.10	0.48
	三者	4.38	2.07	4.17	1.72	3.89	1.42	4.06	1.61		0.34
なじみ	二者	5.75	1.28	4.72	1.71	4.75	1.11	4.89	1.38	0.27	1.88
	三者	5.75	1.28	5.11	1.57	4.93	1.27	5.11	1.38		1.10
敬意	二者	5.00	0.76	4.89	1.08	4.64	1.47	4.78	1.25	0.14	0.35
	三者	4.25	1.83	4.39	1.72	4.18	1.33	4.26	1.52		0.10
感謝	二者	4.50	2.33	4.06	1.80	4.29	1.46	4.24	1.69	0.23	0.21
	三者	4.38	1.85	4.33	1.68	4.43	1.26	4.39	1.47		0.02
甘え	二者	3.13	1.64	3.11	1.60	2.93	1.33	3.02	1.45	1.01	0.11
	三者	4.13	2.30	3.44	1.69	3.64	1.39	3.65	1.63		0.48
優越感	二者	2.13	1.25	2.22	1.35	2.46	1.17	2.33	1.23	0.39	0.34
	三者	2.13	1.13	2.17	1.38	2.68	1.36	2.43	1.34		1.04
気安さ	二者	5.13	1.13	4.39	1.94	4.68	1.25	4.65	1.49	0.43	0.68
	三者	5.63	1.41	4.78	1.66	4.75	1.11	4.89	1.37		1.38
かわいそう	二者	1.25	0.46	2.06	1.70	1.96	1.26	1.89	1.36	0.09	1.07
	三者	1.38	0.52	2.00	1.41	1.89	1.17	1.85	1.19		0.80
気がね	二者	4.00	1.31	4.67	1.64	4.07	1.54	4.26	1.54	2.79 +	0.94
	三者	2.00	1.41	3.50	1.89	3.46	1.50	3.26	1.68		2.81 + 1 < 2 +, 1 < 3 +
軽蔑	二者	1.25	0.46	1.28	0.67	1.61	0.79	1.44	0.72	0.43	1.53
	三者	1.13	0.35	1.50	0.86	1.61	0.96	1.50	0.86		0.97
嫌悪	二者	1.13	0.35	1.56	1.04	1.46	0.58	1.44	0.74	0.23	0.95
	三者	1.00	0.00	1.61	0.98	1.57	0.88	1.50	0.86		1.62
憎悪	二者	1.13	0.35	1.17	0.71	1.29	0.53	1.22	0.57	0.80	0.36
	三者	1.00	0.00	1.33	0.77	1.43	0.79	1.33	0.73		1.09
しつと	二者	1.25	0.71	2.22	1.70	1.46	0.88	1.69	1.24	1.43	2.80 +
	三者	1.00	0.00	1.89	1.60	1.75	1.17	1.69	1.27		1.45
屈辱感	二者	1.00	0.00	1.72	1.41	1.46	0.79	1.48	1.00	0.33	1.47
	三者	1.00	0.00	1.83	1.50	1.43	0.74	1.50	1.04		1.98
劣等感	二者	1.25	0.71	2.33	1.94	2.14	1.46	2.07	1.58	0.67	1.38
	三者	1.00	0.00	2.61	2.25	1.93	1.25	2.02	1.64		2.96 + 1 < 2 +
怒り	二者	1.00	0.00	1.28	0.75	1.39	0.50	1.30	0.57	2.06	1.52
	三者	1.00	0.00	1.61	0.92	1.46	0.69	1.44	0.74		1.96
恐怖	二者	1.00	0.00	1.56	1.29	1.46	0.58	1.43	0.86	1.09	1.22
	三者	1.00	0.00	1.83	1.54	1.36	0.62	1.46	1.02		2.25 *
気味悪さ	二者	1.00	0.00	1.39	0.85	1.39	0.63	1.33	0.67	0.25	1.16
	三者	1.00	0.00	1.56	1.15	1.46	0.69	1.43	0.84		1.29
けむたさ	二者	1.00	0.00	1.67	1.19	1.54	0.64	1.50	0.84	0.17	1.85
	三者	1.00	0.00	1.83	1.38	1.57	0.74	1.57	0.98		2.07
うらやましさ	二者	2.50	1.60	3.50	1.95	2.64	1.57	2.91	1.73	2.71 +	1.65
	三者	1.88	1.25	3.06	2.15	2.93	1.86	2.81	1.90		1.18
失望	二者	1.00	0.00	1.61	1.33	1.36	0.56	1.39	0.88	0.12	1.40
	三者	1.00	0.00	1.67	1.37	1.46	0.64	1.46	0.93		1.46

* $p < .05$, + $p < .10$ (Turkey法による多重比較については有意傾向に+を付した)

表5 3人目に対する感情の平均値・標準偏差、及び分散分析結果

		第1クラスター		第2クラスター		第3クラスター		全体		分析1	分析2
		(n=8)		(n=18)		(n=28)		(n=54)		F 値	F 値
		M	SD	M	SD	M	SD	M	SD		多重比較
好意	二者	5.00	1.31	5.11	1.37	4.93	1.30	5.00	1.30	0.10	
	三者	3.00	1.77	3.61	1.58	3.57	1.53	3.50	1.56	0.47	
愛情	二者	3.50	2.07	4.39	1.82	3.79	1.42	3.94	1.66	1.06	
	三者	4.13	1.55	3.50	1.86	3.71	1.44	3.70	1.59	0.42	
かわいい	二者	4.13	1.55	4.50	1.89	3.93	1.44	4.15	1.61	0.69	
	三者	3.50	1.77	3.78	1.86	4.04	1.32	3.87	1.57	0.40	
敬意	二者	2.50	2.00	2.94	1.51	3.25	1.35	3.04	1.50	0.82	
	三者	2.50	1.60	2.39	1.58	2.25	1.11	2.33	1.33	0.13	
感謝	二者	3.88	1.96	4.39	1.72	3.86	1.48	4.04	1.62	0.62	
	三者	1.50	1.41	2.44	1.98	1.64	0.83	1.89	1.42	2.18	
甘え	二者	3.25	1.75	4.06	1.92	3.43	1.57	3.61	1.72	0.93	
	三者	1.13	0.35	1.44	1.15	1.36	0.62	1.35	0.80	0.43	
優越感	二者	1.00	0.00	1.50	0.86	1.46	0.96	1.41	0.86	1.07	
	三者	1.00	0.00	1.28	0.75	1.32	0.67	1.26	0.65	0.77	
気安さ	二者	1.00	0.00	2.22	1.96	1.71	1.01	1.78	1.38	2.34	
	三者	1.00	0.00	2.11	1.84	1.43	0.74	1.59	1.24	2.95 + 1 < 2 +	
かわいそう	二者	1.00	0.00	2.61	2.28	2.07	1.46	2.09	1.74	2.51 + 1 < 2 +	
	三者	1.00	0.00	1.39	0.85	1.36	0.78	1.31	0.75	0.84	
気がね	二者	1.00	0.00	2.06	1.70	1.29	0.66	1.50	1.15	3.72 * 1 < 2 +, 3 < 2 +	
	三者	1.00	0.00	1.89	1.49	1.46	1.07	1.54	1.18	1.74	
嫌悪	二者	1.00	0.00	1.72	1.27	1.75	1.32	1.63	1.22	1.27	
	三者	1.75	1.16	3.67	2.22	2.82	1.70	2.94	1.91	3.15 + 1 < 2	
けむたさ	二者	1.13	0.35	1.78	1.31	1.39	0.88	1.48	1.00	1.42	
	三者	1.00	0.00	1.61	1.33	1.36	0.56	1.39	0.88	0.12	

* $p < .05$, + $p < .10$ (Turkey法による多重比較については有意傾向に+を付した)

うとしたが、話してみると逆に疎外感を感じて弱気になった」という語りも見られた。この語りを踏まえると、2人目への気がねが減っていて強気に二者での関係を固持しようとする分、相手二人の二者での関係が強く意識されて弱気にもなり、二律背反的なものが同時に賦活されて両価的な感情状態が生じたとも考えられる。これは、対人恐怖症者における我執的方向性と没我的方向性（内沼、1974）に通じる関係の持ち方と言えるかもしれない。加えて、このような二者での関係を1つのまとまりとして捉える関係の捉え方は、対人恐怖症者が二者関係に留まっていて、三者関係が持てないために社会的な関係に安定感が得られないという指摘（福井、2007）にも通じ、そのような対象関係における課題が対人場面において関係の持ち方と人数構造の齟齬として現われているとも考えられる。加えて、斎藤（1990）によると、イライラ・不満は敵対、さびしさは悲哀の情緒であり、対人方向性が不明確な情緒である。CL2では、三者となることで敵対や悲哀の情緒が生じるものの、それが2人目という特定の他者には向けられずに自己内で漠然と強まることが特徴と言えるが、これは先の語りのように、3人目が加わったことやそのことで自分が一人になったことに対するものであるためであるとも考えられる。

最後に、CL3においては気がねの得点の下がり具合は3群の中で比較的小さい。そして、2人目への気がねが減ったのにも関わらず、さびしさが増えている。「二者では自分をあまり出さないでどれだけ保てるか、でも嫌な感じにはしたくないし、喋らないと場が持たないから、硬くなって頑張っている感じ。近くなりすぎる感じがして一定の距離を保ちたい。三者になると、つながるのが嫌だから自分から薄めた。一歩下がって少し入っているだけ。ただ、完全に入らないようになったりするのはいや」という語りからは、2人目と近づき過ぎない状況となって気がねは減ったが、関係に入り込まなくなったことでさびしさを感じていると推察される。CL3が実際に対人場面におかれた時は、『近づき過ぎたくないが、離れ過ぎたくない』という関係の持ち方が窺われ、二者という関係が近くなる場では距離をとろうとし、三者という距離をとれる場では離れすぎないようにしながら場における自分を位置づけようとしていることが示唆された。

総じて、CL2では二者から三者への移行に関して特有の変化パターンがあることが推察されたが、CL1・CL3では群内に共通する変化はあったが、顕著なパターンは見出されなかった。

(ii) 二者・三者それぞれの群間比較から

まず、二者ではCL2でCL1と比して苦悩が高く、「活動性」が低かった一方、CL3ではCL1と比してイライラが高く、「活動性」が低かった。「活動性」とは、活発に生き生きできず、能動的になれない感覚である。CL1は「二者ではテンションがあがり、緊張。自分よりも相手が楽しんでもらえるように。2人目は一緒に関係を築いていく相手に受け止めてくれる」というように、お互いに信頼しながらほどよい距離間で一緒に関係を築いていくのに対して、CL2は「受身的で相手に飲まれている。明るくて楽しいけど、脆くて壊してしまいそう」、CL3は「相手と必要以上に距離が近く、自分がもれ出てしまう感じがして場の雰囲気をもめようとする」「自分が晒される感じ」というように、同じように「活動性」が低くても、相手に圧倒されながらも、明るくて一体的な関係を壊さないように自分の能動性を失って苦悩するか、関係を近すぎると感じてその関係にイライラして深め過ぎたくないために関係を薄めようとし、一体感の中に飲み込まれることに拒否的になるか、その体験は対照的であったことが窺われる。

次に三者では、他群に比べ、3人目に対して何らかの感情を強く向けるのはCL2のみの特

徴であり、そこでは相手によらず、「3人目自体というより関係を変えたことに屈辱感」「2人目と対していてうらやましい」というように3人目が加わることで2人目との関係を変えたことに特有の感情が向けられていると考えられる。これは、「3人での状況」自体が問題なのであって、第三者の「誰」たるかが問題ではない”（笠原、1972）という対人恐怖症者に関する指摘にも通じる。しかしながら、CL2では笠原（1977）が対人恐怖症者について述べたような、第三の人にどう思われるかという不安に関連する体験の語りは少数で、「2人目が自分に対してくれるか」というように、3人目よりむしろ2人目がどう思っているかを気にしていたことが示唆された。さらに、CL3と同様に三者でCL1より2人目に気がねを感じるのに加え、2人目への好意が少なく劣等感を感じる点が特有であり、2人目についても独特な捉え方をしていたことが窺える。そこではCL1に比しての特徴として示されたように、CL3と共通する特徴にはなかったCL2特有のものが見られ、「相手同士がまとまっていて、しっかり安定している関係を持っているように思って劣等感を持ち、うらやましい。自分は蚊帳の外で居心地が悪い。自分は何もしなくてもとか、何もできないという感じで消極的になって、言いたいことをあまり言えなかった。2人目は自分には対してくれない」と、2人目が3人目と関係を持つために気を使って2人目を受身的に待っている姿勢の結果、「居心地」が悪く「積極性」が低くなったことが推察された。さらに、2人目にも3人目にも劣等感を抱くことから、『他者2人の優勢と自身の劣勢』という形で相手二人が主で優れたものと理想化し、自分がそれに従属する劣った存在とする関係の構図が窺える。このような体験のありようは、鍋田（1985）が対人恐怖者の防衛の対象関係について論じ、彼らが他者を理想化し、相手のための役割的自己にすすんで同一化しようとし、そこにある種の自己犠牲的な価値を見出すとしていることにも通じる。すなわち、相手二人を理想化し、相手の求める者になろうとして相手同士の二者での関係に入らないでいると考えられるのである。しかし、他者に従属する関係の持ち方の結果、「自分が出せなくてイライラ」というようにうまく機能しなくなり、「他者同士が結びついているようで自分は一人、孤独感や疎外感が結構強い。その悔しさが強いので悲しい。すごく疎外されている感じが強くなって、それに対して結構不満を感じている」というように、3人目が加わることで2人目と一体となり、他者とつながりを感じることも、三者でまとまることもできず、ひとりとしか感じられなくなっていたと考えられる。そこでは特に、不満やイライラといった敵対の情緒が他者に向けられずに自己内で強まる一方で、3人目にはうらやましさを恐怖など劣勢の情緒（斎藤、1990）が向けられている点が強調されよう。

一方、CL3ではCL1より三者で2人目に対して気がねを感じている以外は、他者に対してCL1と異なる捉え方をしているとは言えないのにも関わらず、CL2と共通する特徴が見られた。そこでは「二人が喋っていて一人取り残されている状況を客観的に見て焦るし、困る。私も入りたいなあ。自分以外の人に話されるさびしさや三人のバランスをとるのが難しく苦悩もある。完全に出るのは嫌。疎外されるから」というように、対人恐怖群と同様に相手二人と自分一人になって疎外されることを否定的に捉えていた。CL1では三者は「一度話した人に親近感がわき、同じ立場の仲間が出来た感じだし、気楽」という体験であったが、CL1と比してCL3は2人目と3人目が関わることで他者とのつながりが感じられずに気がねを感じており、他者と一定の距離を保った形で他者との距離を調節し、傍観的なあり方であったと考え

られ、このことが「活動性」や驚きが少なく、生き生きと新鮮な気持ちや活発さのなさにつながっていたことが窺える。さらに、そのような関係への入りきれなさによって、疎外感やさびしさ、苦悩を感じていたことが推察される。ただし、CL1 と比べ、CL2 が疎外感も孤独感も感じているのに対し、CL3 は疎外感を感じているが、孤独感を感じていない。CL3 では「でも、そんなに喋らなくても良いから楽。否応なく入れられるのも嫌で、自分の望んだ時にちょっと入るみたいな感じ」というように、一人になることを自主性を保てることとして肯定的に受け取り、自分を出せないことを否定的に捉えない点が CL2 と異なると言えよう。さらに、「一定の距離を保つことで逆に話が出しやすくなり、おさえるべき枠が作れた」「場を客観的に見て場のバランスをとりながら、自分の位置をコントロールできる」というように、他者と一定の距離をとりながら場を調整する立場をとる関係の持ち方が窺われ、場の中での所属感は失わずにいられることが推察された。このことを踏まえると、CL3 では、場における自分や自他との区別を意識した反応よりも融和的なつながりの次元での排他・疎外の関係の体験の色合いが強かったと考えられ、その他者との融合的な関係の持ち方からは、ふれ合い恐怖症者における母子関係からの分離不全や未成熟な自己（山田ら、1987）にも通じる背景に想定される。すなわち、そこでは他者との『融合—疎外』の軸のみが強調され、他者と融合的な関係になると未成熟な自己が飲み込まれてしまうために関係から距離をとるが、そのことにより疎外感を感じてしまうというありようが推察される。その一方で孤独感を感じなかったことから、場の調和を自ら傍観者的な立場をとることで保っていたために、集団所属感は維持していたことが推察される。落合（1985）によると、孤独感とは疎外感に比べ自己とのかかわりが強く、自己の内面への関心が高い場合に感じ、疎外感とはより他者とのかかわりや自己外の対象に関心が向けられる場合に感じるという。この指摘を踏まえると、三者において CL2 は自己の内面に関心を向け、CL3 はより自己外の対象に関心を向けていたと考えられる。さらに、CL3 はその自己の内面への関心の低さ故に疎外感のみを感じ、孤独感を感じなかった可能性も考えられる。このような体験のありようは、岡田（1993）が内省に乏しく友人との関係を拒否する傾向が高い群を「ふれ合い恐怖的心性」を持つ群としていることや、“ふれ合い恐怖者の悩みは、自分自身に関心が向くのではなく、対人回避をする場面、状況での関係の在り方が気になる”（福井、2001）という指摘にも通じる。加えて、CL3 は三者で CL2 の方が3人目に恐怖を感じ、「まとまり」を感じないという相違点を考慮すると、CL2 では、3人目が二者に加わったことに対して恐怖を感じ、その場で自分と他者がまとまっていなかったように感じられるという人数構造自体への反応があるのに対して、CL3 は「3人目は自分と2人目との間に入る緩衝材で距離を作ってくれる」「2人目と二人でいたら不安でしょうがないが、三者だと2人目がいるから安心」というように、3人目が加わることは肯定的にも捉えられ、『3人目がいるからこそ、2人目ともいられる』といった体験であったことが窺える。これは、ふれ合いを深めていくのに＜母性的援助＞を必要とする（山田ら、1987）とされるふれ合い恐怖症者にも通じるが、CL3 では3人目を母性的な支えとするだけでなく、2人目との距離を作ってくれる存在として位置づけている点が特徴的である。

⑤ まとめと今後の課題

本研究では場・時間性を統一することで、二者状況・三者状況という人数構造の内包する性

質によって引き起こされる体験の個人差が示された。まず、対人恐怖的心性もふれ合い恐怖的心性も高い群では、二者よりも三者になると一人孤立して劣等感を抱く点で、対人恐怖症者の臨床知見に類似する二者から三者への移行に関する特有のパターンが示唆され、3人目への特有の捉え方も窺えた。しかしながら、臨床群のように3人目にどう思われるかという不安（笠原、1977）は少数の語りにしか見られなかった。そして、2人目にも3人目にも特有の捉え方はするものの、その場ではネガティブな体験をしながらも敵対の情緒を他者に向けずに自己内にとどめているという点が特徴的であった。さらに、二者でも一体感を保つための苦悩を感じるという、対人恐怖症者・ふれ合い恐怖症者いずれの臨床知見でも示されていなかった体験も示唆された。一方、ふれ合い恐怖的な特徴を持つ群では、二者から三者への移行に関して群内で共通する変化は見られたが、顕著なパターンは見出せず、臨床知見のように二者で特に困難となるという群内での共通性は見出せなかった。しかし一方で、臨床知見では直接的には記述されていなかった、近づき過ぎると感じるために一定の距離をとりながら他者と対しているありようが示唆され、三者でも対人恐怖的心性もふれ合い恐怖的心性も高い群とも共通するネガティブな体験をしていることが示された。加えて、三者では両者は3人目への捉え方の違いによって区別されることも示唆された。しかしながら、本研究の結果は、あくまで初対面同士の雑談場面のものであるという限界がある。加えて、対人恐怖症者とふれ合い恐怖症者ではそれぞれ症状発現の場や時間性が異なり、ふれ合い恐怖症者は付き合いが長くなってから困難となること（山田、1989；山田ら、1987）を踏まえると、今後より親密になる場面での体験の検討が課題となる。また、本研究では数量的検討によってクラスター間での体験の相対的な特徴が明らかとなった一方で、量的分析結果に合致した結果のみの考察を行なったことで、量的分析に合致しない語りや各群の質的な相違、個人ごとの体験のありようについては十分に検討しきれなかった。今後、より細やかな質的検討が求められる。

Ⅳ. おわりに

筆者は個人面接とグループ活動をコンパインした臨床実践に携わっている。そこでの臨床経験では、三者以上のグループにうまく入れないなどの困難を示し、セラピストが支えとなって二者状況から三者状況にいかにか橋渡しをしていくかということがテーマとなる事例に加えて、三者以上のグループ活動では比較的自由に振る舞えるが、個人面接という二者状況では困難を示してセラピストから距離をとるなどし、一対一で向き合う関係を築くことがテーマになる事例も少なくない。そこでは、従来のオーソドックスな『二者での関係を基盤に三者以上の関係へ』という観点だけでなく、『三者での関係を入り口にして二者での関係へ、そして再び三者での関係へ』という、従来とは逆の方向も含んだ、二者での関係と三者での関係を行き来しながらの包括的な援助の観点がますます有用になってきているように思われる。加えて、特に青年期のクライアントには前述のような対人恐怖の・ふれ合い恐怖的な体験をしている人も少なくないと考えられ、それぞれの心性を持つクライアントの理解にあたっても体験を併せて理解していくことは重要となろう。本研究で示された、『2人はよいが、3人ではひとりぼっちになるように感じられる』『3人の中では2人でいられるが、2人きりではいづらい』といった体験のありようを念頭に置きながら、臨床場面や日常の対人関係に表れる個人の対人パターンとそ

の底にある対象関係を眼差し、二者状況・三者状況を巡って訴えられる苦しみに寄り添っていくことも有意義なのではなかろうか。

＜付記＞本論文は京都大学大学院教育学研究科に提出した修士論文を加筆・修正したものです。ご指導いただきました田中康裕先生、大山泰宏先生、調査にご協力頂きました皆様に心より御礼申し上げます。また、京都光華女子大学の徳田仁子先生にも貴重なご助言を賜りました。深く感謝申し上げます。

【引用文献】

- 福井康之(2001):新しく出現したタイプを含む対人恐怖の質問紙調査による分類の試み 心理臨床学研究, 19(5), 477-488.
- 福井康之(2007):青年期の対人恐怖—自己試練の苦悩から人格成熟へ 金剛出版
- 堀井俊章・小川捷之(1997a):青年期における対人不安意識の発達の变化 心理臨床学研究, 14(4), 448-455.
- 堀井俊章・小川捷之(1997b):対人恐怖心性尺度の作成(続報) 上智大学心理学年報, 21, 43-51.
- 磯 友輝子・木村昌紀・桜木亜季子・大坊郁夫(2003):発話中のうなずきが印象形成に及ぼす影響—3 者間会話場面における非言語行動の果たす役割 電子情報通信学会技術研究報告書, 103, 31-36.
- 伊藤 亮・村瀬聡美・吉住隆弘・村上 隆(2008):現代青年における“ふれ合い恐怖の心性”と抑うつおよび自我同一性との関連 パーソナリティ研究, 16(3), 396-405.
- 笠原 嘉(1972):正視恐怖・体臭恐怖—主として精神分裂症との境界線について 医学書院
- 笠原 嘉(1975):対人恐怖 加藤正明・保崎秀夫・笠原嘉・宮本忠雄・小此木啓吾(編)精神医学事典 弘文堂, 427-428.
- 笠原 嘉(1977):青年期—精神病理学から 中公新書
- 片畑真由美(2006):臨床イメージにおける内的体験についての考察—箱庭制作体験における「身体感覚」の観点から 京都大学大学院教育学研究科紀要, 52, 240-252.
- 松井三枝(1990):対人不安と対自我認知体系—Self-identity System の検討 心理学研究, 61(2), 94-102.
- 鍋田恭孝(1985):発達の視点からみた対人恐怖症 役割的自己の病理—その歪んだ二者関係 精神科 MOOK, 12, 76-88.
- 永山智之(2009):二者関係から三者関係に移行する場面における主観的体験の変容—大学生同士の対人場面を用いて 心理臨床学研究, 26(6), 741-747.
- 落合良行(1985):青年期における孤独感を中心にした生活感情の関連構造. 教育心理学研究, 33(1), 70-75.
- 小川豊昭・笠原 嘉(1987):構造としての対人恐怖パラノイア 高橋俊彦(編)分裂病の精神病理 15 東京大学出版会, 257-284.
- 岡田 努(1993):現代の大学生における「内省および友人関係のあり方」と「対人恐怖の心性」との関係 発達心理学研究, 4, 162-170.
- 岡田 努(2002):現代大学生の「ふれ合い恐怖の心性」と友人関係の関連についての考察 性格心理学研究, 10, 69-84.
- 斎藤 勇(1985):対人感情と情緒の人間関係的アプローチ 心理学研究, 56(4), 222-228.
- 斎藤 勇(1990):対人感情の心理学 誠信書房.
- 高橋 徹(1976):対人恐怖—相互伝達の分析 医学書院
- 内沼幸雄(1974):恥・罪・善悪の彼岸—精神病理学的考察 思想, 601, 1-25.
- 山田和夫(1989):境界線の周辺—サブクリニカルな問題性格群 季刊精神療法, 15, 350-360.
- 山田和夫・安東恵美子・宮川京子・奥田良子(1987):問題ある未熟な学生の親子関係からの研究(第 2 報)—ふれ合い恐怖(会食恐怖)の本質と家族研究 安田生命社会事業団研究助成論文集, 23, 206-215.
- 山本 力(2001):研究法としての事例研究 山本 力・鶴田和美(編著)心理臨床家のための「事例研究」の進め方 北大路書房, 14-29.

注 1:大学生に実施した予備調査において、学年が異なることがコミュニケーションのあり方や立場に少なからず影響を与えていたこと、「親密条件」「討論条件」という談話ジャンルによって会話パターンが異なること(磯ら, 2003)を考慮し、初対面の同性・同学年同士の「親密条件」の体験場面を用いた。なお、対人恐怖症者が雑談場面と同年代関係を苦手とし(笠原, 1972, 1977), ふれ合い恐怖症者でも雑談恐怖がしばしば伴うこと(山田ら, 1987)にも留意した。

注 2:会話時間は予備調査を踏まえ、調査協力者の負担も考慮して 10 分間とした。また、座席の距離が体験に及ぼす影響を考慮し、磯ら(2003)を参考に 120 センチで統一した。

注 3:今回は紙幅の都合で分類結果の検討は見送るが、主要な特徴を示す。CL1 は二者では「最初緊張するが、徐々にリラックスした」「明るく見せようとしながらもビクビクした」一方で、三者では「2 人目を支えに楽しむ」「気楽」が多かった。CL2 は二者では「明るい雰囲気である」「相手が不快感をもたないか気になる」「気軽」「警戒」など多様であり、三者では一部、「場を調整しながら楽しむ」体験も見られたが、「相手同士 2 人と自分という構図と捉え、孤独だった体験」が大半であった。CL3 は二者では「相手と距離が近すぎると感じていつらく、一定の距離を保とうとした」「相手が受け止めて引き出してくれる相手で楽しかった」一方で、三者では「場や 3 人全体を意識し、バランスをとる難しさに苦悩したりもするが、2 人目が仲介役となって連帯感」「相手 2 人がベースになって寂しさや疎外感を感じたが、全体としては満足した体験」に大別された。今回はこのうちの量的分析に合致し、より人数の多かった体験に着目した。なお、語りの抽出にあたっては山本(2001)が「リサーチ・クエスチョンを明らかにするうえで、事態の本質を最もあらわしている事例はどれか」という問いかけによって浮かび上がってきたものを「典型例」としていることを踏まえて選択した。

(心理臨床学講座 博士後期課程 1 年生)

(受稿2010年9月6日、改稿2010年11月26日、受理2010年12月9日)

Commu-phobic Tendency and Anthropophobiatic Tendency Through Subjective Experiences in Dyad and Triad

NAGAYAMA Tomoyuki

The purpose of this study is to clarify the relationship between commu-phobic and anthropophobic tendencies of subjective experiences in dyad and triad. The participants, university students were asked to experience the process from a dyad situation to a triad situation; measurements of their ways of relationship, sense and feeling were collected. Cluster analyses were used for variables concerning commu-phobic and anthropophobiatic tendencies, and three large clusters were found. The students in cluster 1 showed a low level of anxiety. They have a slight tension in dyad and good experience in triad. Students in cluster 2 showed a high level of anxiety. As the pattern peculiar to this cluster in the process from the dyad situation to the triad situation, they tried to keep a sense of unity in dyad, but they recognized the bond of others and felt dissatisfied in triad. They felt unique feeling with the third persons, and as if they were alone in triad. Students in cluster 3 showed only commu-phobic tendencies. While they felt too close to the other and were irritated in dyad, they felt lonely, but they could be relieved to be with the second persons in triad. As a result, it was suggested that when a discrepancy between the way of relationship with others and the situation was showed, they had specific negative feelings.